

I 経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
「笑顔あふれる 元気な子」	見つけよう 遊ぼう つながろう	子どもが好きな場所や好きな友だち、好きな遊びを見つけて遊んでいる	好きな遊びを見つけ、主体的に遊びだすことで友達とのつながりが生まれていた。廃材コーナーのような「やりたい」を実現できる多様なコーナーを充実させ、経験の積み重ねを意識した保育を展開していきたい。	A	A	参観での遊びの様子からも、子ども達が遊びを見つけ、楽しんでいる様子が伝わってきた。	ハサミ、ノリの扱いなどを発達段階に応じて必要な技能を身に着けられるよう全学年で共有する。
		子どもが、一人または友だちと夢中になって遊んでいる	子どもの声を拾い、遊びのどこに面白さを感じているのか読み取り、環境の再構成をすることで夢中になって遊ぶ姿が見られた。しかし、遊びの深まりや継続が課題となった。どんな遊び、どんな素材、何を経験させたいかを明確にして保育していく必要がある。	B	B	保育者の環境構成の工夫が十分感じられた。更に高みをめざしたいという志を尊重したい。	子どもの心の動きを捉えた日誌の記録に力を入れたが、遊びの先の見通しが十分ではなかった。日誌の記録は子どもの心の動きや保育者の援助を明確にして考察できるよう色分け用の蛍光ペンを使用する。遊びの見通しを持てるよう、期の保育計画を立てる。
		子どもが、いろいろな友だちとつながり、明日へと遊びを繋げている	夢中になって遊ぶことで、友達とのつながりが広がった。また散歩などで異年齢児との交流が深まり、親しみが増している。遊びが明日へつながる為に、振り返りの時間が効果的だったが、かかわり方の工夫が足りないという課題が上がった。	B	A	これまでの保育参観や資料からも、友達や異年齢児とのつながりを大事に保育していることが伝わってきた。	コロナによる規制が緩和され、異年齢とのかかわりを復活させているところなので、引き続き取り組んでいく。

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	発達の連続性を考慮し、発達や経験の差を理解把握した上で、学年目標に向けて保育が進められている	学年、個々の発達差を理解するための話し合いができています。ホワイトボードに各クラスの週の手帳を記入し、他のクラスとの連携に努めている。乳児会議、幼児会議での話し合いを引き続き行い、日々の声掛けや他クラスへの関心を高め、発達の連続性を意識していきたい。	B	A	情報を共有するための視覚化や話し合いの時間の確保等、学ぶ意欲が感じられた。	各クラスでの言葉による伝達不足が課題に上がっているため、チーム保育の基本である伝え合いをしっかりと行っていく。週案は月曜朝に各保育室に貼り、内容を共有する。
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	在園時間、生活リズム違いを踏まえた配慮がされ、子どもが安定した気持ちで園生活を送っている	個々の発達や生活リズム（午睡をしない子、登園が遅い子、午前中に眠くなる子、排泄、着替えのタイミングなど）に合わせ、丁寧にかかわりができている。早、遅番保育の伝達をクラスボードに記入すると共に、口頭でも伝えるよう意識している。パート職員を含めた情報共有がもう少しできるようになると良い。	B	B	保育参観や説明から、個々のリズムに合わせ、丁寧に保育している様子が伝わってきた。	これまで以上に、個々の情報を得るために、気になることは声に出し、一人ひとりの一日の生活をつなげていく。
	(3)環境を通して行う教育及び保育	試したり工夫したりする環境が整えられている	試したり工夫したりする楽しさが味わえるよう、廃材、自然物、手作り玩具などを用意し、環境を整えた。遊び、生活をつなげることを意識し、生活発表会では普段の遊びの一部を見てもらうことができた。課題としては、より良い環境づくりやかかわりができるよう、遊びをどう広げ、発展させ、子どもたちにとってどんな学びが得られるか明確にしていきたい。	B	A	環境は十分整えられている。子どもの視線が大切だから、子どもが見つけたことにどう寄り添っていくかが大事だと思う。	遊び出しの環境構成では成果が見られたが、遊びの広がりや深まりにつながる環境の再構成が課題になった。子どもの気づきを支えるための援助の仕方に視点を置き、職員で話し合う。
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な災害を想定した訓練に取り組み、非常時の対応を身につけている	毎月の訓練の中でヘルメットのかぶり方、話しの聞き方が上手になった。想定に応じた避難の仕方も身につけてきている。保育者の意識をさらに高められるよう、予告なしの訓練をもう少し取り入れたり、マニュアルで振り返りをしたりするとよいという声も上がった。	B	B	能登半島地震の体験談から、実際と想定では違いがあることが語られた。いかにリアルにあらゆる想定をしていくかがポイントになる	リーダーが不在など、災害時に起こりうる様々な想定を行い、訓練に取り組んでいく。（不審者訓練の想定バリエーションを増やす）
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	年齢にあった生活習慣の自立に向けて、家庭と連携を取りながら、個に合った援助をしている 食育活動を通して食への関心を高めている	ハンカチ携帯の呼びかけを続けてきたことで、携帯する子が増えた。生活習慣の自立に向けては（お箸、身支度、登園時間など）個々に合わせた対応を行っている。今後も実態に応じて園から発信していきたい。栽培活動は、子どもたちが目にしやすい場所にプランターを移したり、水やりや生長を喜ぶなどを一緒にに行い、植物への興味を引き出すことができた。次年度も続けていきたい。食育に関しては、食べる楽しさを味わえるよう、給食さんと連携をとりながら進めることができた。	B	B	箸の持ち方など、園でポイントを伝えることで家庭で取り組みきっかけになると思う。今後も啓発していくと良い。	引き続き、生活習慣の自立に向けて必要なことは、子ども達に伝えたり、手紙等で啓発し、家庭での教育力を高めていく。（ハンカチ携帯、全体的計画に基づき、給食の食材への関心を高める話しを各クラスで行う）
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	一人一人の発達や特性を理解し、生き生きと遊びや生活ができるよう、職員で共通理解し、支援している	サポートプランを作成し、面談を行うことで、家庭と園で育ちを共有し、支援体制をとることができた。トーマスの会では担当が話し合いを重ね、子どもたちの興味や発達に合った企画を立て、活動を展開することができた。活動の様子を手紙で家庭に伝え、連携に努めたが、職員への周知を強化したいという課題が上がった。	B	B	特別支援児への配慮や支援の方法を工夫していることが資料から伝わってきた。	現状に満足せず、特別支援教育に対する専門性を個々が高めていけるよう、研修への参加を計画的に進め、学ぶ場を作る。
5 組織運営	(1)組織体制の充実	職員一人一人の良さ、得意を活かし、協力して教育保育を進めている	日頃からコミュニケーションを多くとるように心がけ、職員一人一人が自己発揮しやすい職場の空気を作り出すことができた。行事、誕生会の出し物では一人一人の得意なことを十分活かすことができた。協力できているという声が多い一方で、クラスを超えた連携をもっと強化したいという声もあった。	B	A	節分への取り組みでは、保育者が子ども達と一緒に心をワクワクさせたながら取りむ気持ちが伝わってきた。	個々の特技が活かされた一年だった。乳児会議に幼児の保育者が入り、互いの遊びや生活の様子を伝え合う。
6 研 修	(1)研修体制の充実	重点目標の達成に向け、研修計画に基づいた園内研修を行っている 園外研修に積極的に参加し、個人の専門性を高めている	研修部を発足させたことで年間の研修を計画的に進めることができた。重点目標、研修テーマに出る「つながる」がキーワードとなり、学びを得るための工夫をしながら学ぶことができた。参加できないパートの先生たちと学びが共有できるよう掲示や研修日よりなどで発信しているが、周知が十分ではないことが課題である。	B	B	十分頑張っている姿が伝わってきたが、更に高みを目指したいという志を尊重したい。	園全体として同じテーマや課題に向けて考えることができるよう、パートの職員も事後研修に参加できるように年間計画を立てる。
7 教育・保育環境 整備	(1)教育・保育環境の充実	毎月の安全点検やヒヤリハットの検討を行い、常に安全な環境を心掛けている	毎月の安全点検、ヒヤリハットは報告を行い、危険箇所は声に出してすぐに改善できるように努めている。しかし、ヒヤリハットでは周知が十分ではないことが課題になったので、その日のうちに対策を話し合い、報告した後、全体への周知の仕方を再度検討していきたい。	B	B	乳幼児は思わぬ事故があるので、引き続き、安全面に対する努力をしてもらいたい。	保護者アンケートから、玄関入口の施錠に対する不安も上がっていた。午睡の時間と雨天の午前中は玄関を施錠することを共通理解し、保護者にも園日より伝える。
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	保育教諭が進んで挨拶をする お便りやボード、ホームページなどで、園での取り組みや子どもの姿を伝えている 日々の声かけから、保護者の思いを聴いている	クラスのボード、連絡ノート、ホームページで遊びや生活の様子を伝えることができた。写真やイラスト、楽しさを表す言葉を加えて、保育のワクワク感が伝わるように工夫した。親子遠足、参加会では普段の子どもの様子を保護者の方に見てもらい、保護者同士の交流の場にもなった。少しずつ、以前の行事を復活させていくことができた。	A	B	就学前教育など、園と保護者で捉え方に差があるようだが、専門的な立場で、幼児期につけたい力をしっかりと保護者に伝えられるようになるとうと良い。	保育の専門家としての知識を運動会、発表会、など保護者が集まる行事で、子どもの姿と行事にまつわるエピソードを交えながら園長、副園長、担任から伝えていく。保護者との連携が深まるよう、ICTの活用も一歩ずつ積み重ねていく。
9 近隣の学校・園との連携	(1)近隣の学校・園との連携の推進	近隣の園や小学校との公開保育や授業を通して、情報交換や交流の場を作っている	園庭開放を通し、近隣の小規模園との交流が活発になってきている。また、近隣園、小学校の公開保育に参加し、学ぶことができた。自園の公開保育には、公私立の保育者も参加し、多くの学びを共有できた。小学校まで距離があるが、秋、冬ならば年長児が歩いていける距離なので、今後交流の計画を立てていきたい。	B	B	清沢こども園との交流では、子どもから楽しみにしている思いが十分伝わってきた。保育での取り組みが伝わってきた。	年間計画で、小学校との交流を2回入れていきたい。（服織中央こども園、清沢こども園、近隣の小規模園）との連携も行っていく。
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域の様々な人との交流を通し、園ではできない経験をしている 地域の子育ての場となっている	中学生の職業体験、千代さんの芋ほりなど、様々な形で地域の方と交流することができ、園生活が豊かになっていくことを実感した。経験したことを振り返ることができるような掲示や展示を行い、経験がその後の生活につながっていくよう意識した。子育てサロン、一時預かり、園庭開放は、地域をつなぐ場、子育てで重要な役割があることを認識し、今後も発信していきたい。保育者が、地域の産業へも目が向いてきているので、地域マップなども積極的に活用していきたい。	A	A	様々な形や方法で地域とのつながりを大事にしていることが分かった。今後も地域をつなぐ場としての役割に期待したい。	地域とつながることで、子ども達の生活が豊かになるよう、知ったり、見たり、聞いたりしたことを掲示したり、展示したりする。